

# 古代とつなぐ大地のエネルギーを表現するアーティスト

真砂秀朗



画集「Colors in the Wind」からBlue Lake



世のアーティスト達は、その内なる自分自身の魂を表現するために、様々な方法を用いている。絵画や踊りや音楽や焼き物などetc.。その全ての人が、とは言えないかもしれないが、不思議に言おうか、自然に言おうか、都会での生活を楽しんでいた人も、いつの間にか、より自然の多い所に移動していたりする。

自然の中に身を置いた方がインスピレーションを受けやすいのかもしれない。彼らは彼女らはそんな時、自然の何を感じ、何を得るのだろうか。その人その人の奥底に隠れていたものが、自然の力によって導き出される時、アーティスト自身も、人間として自然との深いつながりを感じとるに違いない。

真砂秀朗氏は、神奈川県葉山町に移り住んで20年以上になる。以来ずっと真砂氏の中では様々な才能の扉が開き続けている。

「若い頃には東京に住んで、青山や銀座に通う生活も行っていったんですよ。でもその時は自分が納得できる作品は作れませんでしたね」

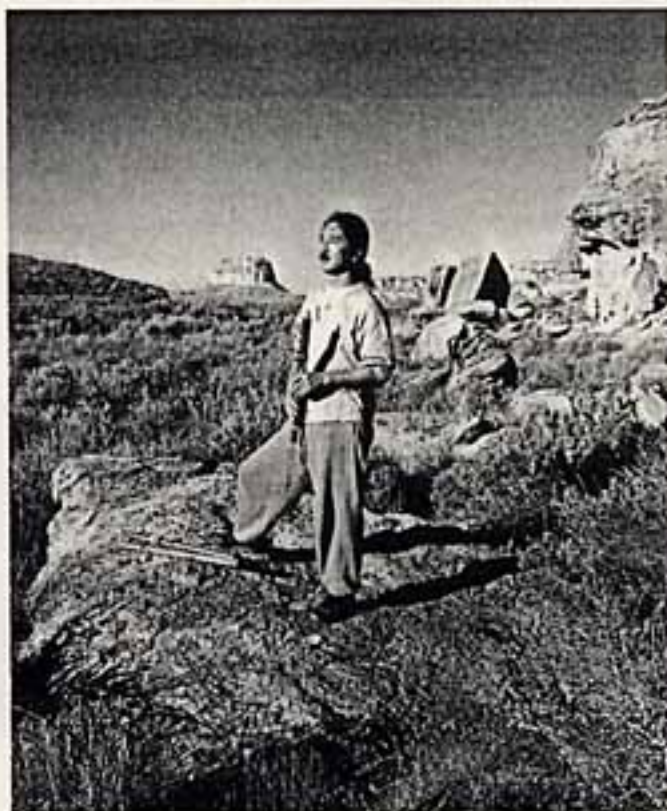
子供が生まれるのをきっかけに、都会から離れようと決心。それまでの全てをゼロに戻して始めたかったと真砂氏は振り返る。

「僕は元々学生の頃からアメリカのヒッピー文化の影響を受けていたもので、アメリカにまずは行きたかったんですが、なぜか最初はインドに行

ってしまっ  
たんです  
(笑)。半年  
くらいブラ  
ブラしてい  
ました」

肝炎で帰  
国せざるを  
得なくなっ  
た真砂氏が、  
インドで最  
も感銘を受

チャコキャニオンにて



けたのは、岩の寺の存在だった。この岩との関わりは、真砂氏にとって、感性の扉を開く大きな鍵となった。「エローラ」という仏教遺跡があるのですが、4000年程築かれた所で、巨大な岩山にお寺が彫刻されて造られているんです。時代時代に何代にも分けて彫っていたようです。その時間の流れのスケールの大きさに圧倒されて、しばらくは落ち着きませんでした」

この時は気づかなかったが、岩はその後の真砂氏にとって、ひとつのキーポイントとなっていくのである。

「古代の人々は岩の中に何年も暮らすことで、多分、地球と共にいるということを実感していたのではないのでしょうか。そのエネルギーを感じた古代の人は岩を神聖な場として見るようになり、神聖な岩から寺だけが独立してエローラのような形になったのだと思います。昔から人間と岩は強い結びつきがあったと思いま

す」

地球の中から感じる大地のエネルギーは、ひよっとするとその穴に住む人々の能力の扉を開けるきっかけとなっていたのかもしれない。

インドから帰国後、デザインなどメディアの仕事をする一企業に入社した真砂氏。だが内容的に満足できず3年で退職した。仕事をしながら自分なりの絵も描いていたが、筆を持つ以前に、自分自身がきちんと完成されていなければ描けないことを強く実感したという。そこでそれまでの仕事を全て手放して、かねてから行きたいと思っていたバリ島へ向かった。

「バリでは文化として衣食住が確立されているが、非常にプリミティブなんです。インドとは違って、同じヒンズー教でも純粋なところのみが入ってきていて、自然と共に暮らす生活がとても心地いいんです。自然の中の仕事があり、それと同じ

チャコキャニオンのキバ



タオプエプロのシンガー、リチャードさんと

Amazing Blue  
¥2,854 (税込)Planet Love  
¥2,940 (税込)Colors in the Wind  
¥2,940 (税込)Chaco Journey  
¥2,854 (税込)NEW 真南風  
¥2,700 (税別)

くらの位置に音楽や絵画や踊りがあり、神聖なる祭りがある。20年前は今よりずっと何もない時でしたから、百姓の親父が畑で働いて、その後ちよつと絵を描いて、夕方からは仲間と楽器を演奏するというような百姓ミュージシャンと画家という在り方が自然な姿だったんです」

大自然の中に棲む精霊を敬い、折るために、竹などで作った楽器で音を奏で、舞い、自然の精妙さを絵として、表現していく。自然とアーティスト達は、生活を通して強く結びついているのだ。

「何度も足を運んだバリのイメージが、できるだけ持てる場所を探して見つけたのが、ここ葉山だったんです」

そして出会ったのが太鼓だった。「西アフリカの太鼓には、はまりました(笑)。アフリカでは生活の中

に音楽が存在します。冠婚葬祭の時には楽器を鳴らし続け、病人が出るに、村のシャーマンが特別なリズムで太鼓をたたき、病気をなくさせようとします。それぞれの村には、その村に伝わる独自のリズムがあるのです」

真砂氏が自分なりの音楽として向かうきっかけとなったのが、まさしくその太鼓だった。

「そのうち、あちらこちらで呼ばれるようになり、神社の祭祀の時に演奏したりしました」

太鼓の音は人間の奥底から太古のバイブレーションを導き出す、地球の、大地の音なのかもしれない。「たたきながらトランス状態になっていった時など、自分と地球はイコールだということを強く感じます」

その頃真砂氏は、初めて西アフリカの土を踏む体験をする。その西アフリカでも、岩の存在があった。マリのドゴン族の村では、巨大な岩山に横穴をあけて、人が住んでいたのだ。真砂氏が西アフリカの太鼓に魅せられた大本には、やはり岩(大地)があった。

動き出したという気持ちになったきっかけの場所です」

インディアンの人達の音楽は歌詞はなく、声とリズムがメロディとなつていく。そしてやはりそこにもあった。チャコキャニオンには古代の民であったアナサジが残した遺跡の跡に円形の大穴が掘られていたのだ。「それは、キバ」と呼ばれる神聖な場所として掘られた穴です。地球上の全ての生命は、この母なる大地の子宮を通じてこの地上に出てきたと考えられていて、キバをその子宮のシンボルにして、そこで祭祀を行っていたと言います。何か大切なことを決める時は、真つ暗なその穴に入つて決めたそうです」

神や聖霊とつながる場所は、はるか昔から人間達の手で岩や大地に接する形で作られてきた。そこで聴こえてくる神の声は、折りや、歌や、音や、絵で人々に伝わっていったに違いない。

真砂氏のCD「Chaco Journey」は、まさにかつてこの地で古代の人達が感じた、大地のバイブレーションを感じ、地球のエネルギーとつながりながら奏でた音が収録されている。自然には、同じ自然の一部である人間の感性の扉をいつでも開くことのできるパワーが秘められていることを、音や絵などを通して表現し続けている人々。そこそこが、アーティスト達なのだ。その一人である真砂氏の新たな感性の扉は、これからも開き続けていくに違いない。

## まさご ひであき

世界各地のネイティブアメリカンへの旅の中で出会った楽器を演奏しつつ独自の音楽を制作し、同時にヴィジュアルアートの分野で活動をしているアーティスト。1952年生まれ。東京芸術大学美術学部卒。88年のいのちのまつり、89、90年ライオンのうた、91～94年湯島聖堂Music of NAGA等のコンサートをプロデュースし、ワールドミュージックを紹介する。その間、日本人のアイデンティティを探しをテーマにアフレベルを開始。「しおのみち」「弓の島」等のアルバムをプロデュース。92年から重ねた北アメリカ南西部の旅でインディアンフルートに出会い、新たな表現が始まる。インディアンフルートを中心に、曲作り、演奏活動、また色々なミュージシャンとのコラボレーションを重ね、「Chaco Journey」をはじめ数々のアルバムをリリース。ヴィジュアルアートの領域では、毎年佐渡で開催されるEarth Celebrationのアートワークや水彩画、版画の展覧会、絵本等における制作活動をしている。www.awa-muse.com



## ●コンサート

5日(土)北九州 木屋瀬ホール 問い合わせ/ノーティス(神保) Tel/Fax093-511-2592 13日(日)葉山福祉文化ホール「ミュージック・オブ・ニューネイティブ」問い合わせ/AWA Office Tel/Fax0468-76-3074 mail:office@awa-muse.com 18日(金)松山市民会館ホール 問い合わせ/塚本葉子 089-931-4655 mail:YHV00073@nifty.ne.jp 19日(土)松山エスパ21「トーク&ライブ」民族楽器やそのリズムについてのお話と演奏 問い合わせ/川東伸江 089-951-3159 20日(日)伯方島 喜多浦八幡神社 問い合わせ/中野和美 0897-72-1549 22日(火)今治 アート&クラフトKyo 問い合わせ/長尾暁子 0898-33-0418

## ●展覧会

22日(火)～27日(日)「絵と音」展 今治 アート&クラフトKyo 問い合わせ/長尾暁子 0898-33-0418 常設 PLANTS内 Gallery Inter Natural Garden 横浜市青葉区荏田西1-3-3 Tel045-910-12463